

「確かな学力の育成」 ～学習意欲の向上に関する研究・実践～

仙台市教育委員会

はじめに

本市では、これまで全国学力・学習状況調査結果と独自の標準学力検査の結果から、児童生徒の学力を的確に把握し、教員の指導力向上、学校での学力向上策や施策の検証を行ってきた。4年目となる今年度は、調査結果の経年変化を見据えながら、各学校では、「学力向上〇〇学校プラン」を作成し、実践してきている。調査結果をひとつの指標としたPDCAサイクルができています。

本事業では、調査結果から様々な課題を持つ、調査活用協力校を指定し、その改善を試みた。

I. 仙台市教育委員会における取組

1. 事業内容について

(1) 事業概要

①全国学力・学習状況調査

全国学力・学習状況調査の結果（あくまでも抽出校の状況であるが）を分析し、指導改善の手引きを「仙台市確かな学力研修委員会」が作成し、「仙台市学力向上担当者会」において、各校に解説した上で配布し、教員の実践的指導力の向上に努めた。

②仙台市標準学力検査

本市では、小学校2学年以上のすべての小中学生を対象に独自の仙台市標準学力検査を実施し、学力向上の取組の成果の把握と検証を行った。

期待正答率と同等以上の割合を増加させることをねらいとし、小学校においては、基礎的知識の平均正答率は、すべての学年、教科で期待正答率を上回り、中学校においては、社会科の3学年以外は、すべて期待正答率を上回った。

③仙台市生活・学習状況調査

22年度からは、全国学習状況調査と同様の項目に本市独自の項目を加えた仙台市生活・学習状況調査を実施した。このことにより、これまで以上に詳細な学力及び学習状況の分析と検証が可能となった。

生活・学習状況調査の検査結果の一部を下記に示す。

表1 仙台市生活・学習状況調査の結果概要
(抜粋)

【学校生活】

○すべての学年で、9割以上の児童生徒が、学校で友達と会うのが楽しいと感じている。
○学校の決まり（規則）を守っている割合が、小学校高学年より中学校が多い。

【授業】

○本やインターネットを使って、グループで調べる活動をよく行っていると思う児童生徒の割合は、中学校になると減少するが、全国と比べると高い割合である。

【家庭学習】

○家庭学習を1時間以上している児童生徒の割合は、小学生で5割程度、中学生で6割程度であり、全国と比べるとやや低い割合である。

④学習意欲の科学研究

学習意欲に関しては、平成22年2月、東北大学と共同研究を締結し、脳科学の知見を活用して、科学的に研究するプロジェクトを立ち上げた。小学2学年以上で実施した標準学力検査と生活・学習状況調査の相関を調査することが可能となり、学習意欲の向上、生活習慣や学習環境の改善に活用することができた。これらの結果の一部を以下に示す（表2）。

表2 学習意欲の分析結果の概要

内発的動機付けの重要性（図1）

低学年では、「勉強しないと叱られる」「みんなが勉強している」という外発的な理由から学習時間を確保しても、学習状況に良い影響を与

えないことが明らかとなった。むしろ、低学年では「知ること、分かることの楽しさ」を実感させることによる内発的動機付けが重要といえる。

高学年から中学に至っても、内発的動機付けによる学習時間の確保が学習状況に直結する。一方、外発的動機付けも学習状況との関係で正の値を示した。

生活習慣・学習習慣の重要性(図2)

授業の準備物を前日に整えることや、学校の宿題をしっかりとすることは、学年を問わず、学習状況との関係で正の値を示した。毎日、朝食を(主食・副食ともに、家族と一緒に)取ることについても全学年で、学習状況と正の値を示した。

また、家族とのコミュニケーションと学習状況については、高学年以上で正の値を示した。テストで間違えたところを見直すなどの学習姿勢も大切であることが確認された。

発達段階に応じたキャリア教育の重要性(図3)

将来の目標については、発達段階を踏まえて考えさせることが重要といえる。低学年では、将来の夢などについて、大きく自由な発想で考えさせること、高学年以上では、将来の可能性や具体的な進路をしっかりと考えさせることにより学習状況に正の値を示すことが分かった。

図1(動機付けと学習成績の関係)

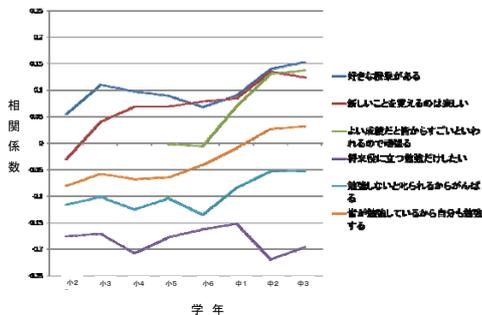


図2(生活・学習習慣と学習成績の関係)

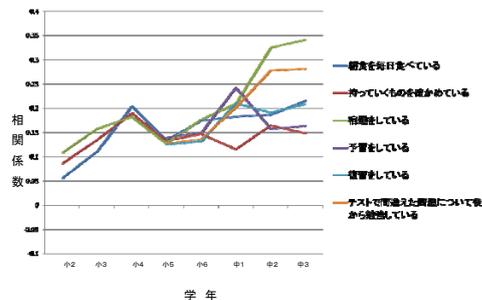
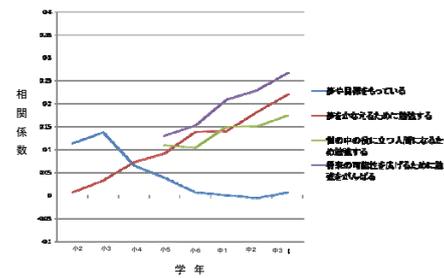


図3(将来の目標と学習成績の関係)



⑤確かな学力研修委員会

本市では、宮城教育大学と連携し、大学関係者及び指導主事並びに校長、教頭、教諭からなる「仙台市確かな学力研修委員会」を組織して、全国学力・学習状況調査及び仙台市標準学力検査の結果を分析している。明らかとなった課題とその改善策をシートにまとめたり、研修委員による小中学校9教科での「提案授業」を実施したりすることによって、教員の実践的指導力の向上を図ってきた。

実践の内容は、報告書にまとめた上で各校に配布し、授業改善に期するところである。

⑥学力向上担当者会

年間3回、各校の学力向上担当者を対象とした研修会を行い、学力向上に関する実践発表や、中学校区ごとの情報交換を行った。地域の実態を踏まえた学習習慣の形成や指導方法の工夫、小中の円滑な接続に向けた交流の企画などについて活発な意見交流がなされた。

⑦学力向上プラン集の作成

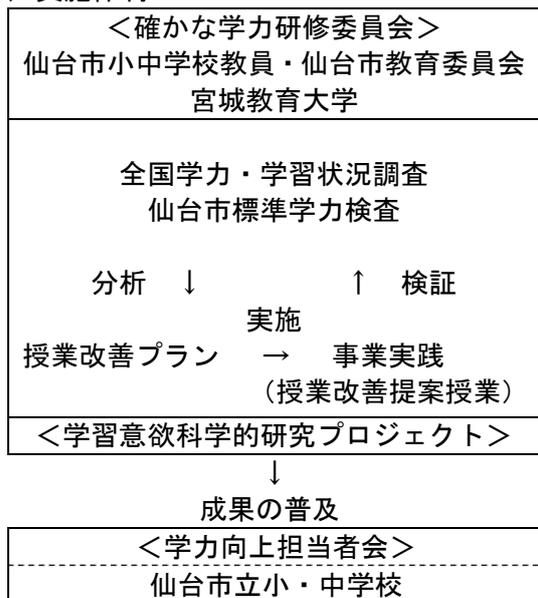
各校では「全国学力・学習状況調査」や「仙台市標準学力検査」の分析を踏まえて学校独自の学力向上プランを作成し、指導改善に取り組んだ。学力向上プランは、プラン集として各校に配布した。

⑧仙台市スタートカリキュラム

小学校入学児童がスムーズに学校生活に適應できるようにすることや、小1プロブレムの解消を目指して、モニター校において「仙台市スタートカリキュラム」を実践し、入学期の安定を図った。

また、ボランティアを活用して落ち着いた学習や生活に取り組める環境をつくる「小1のための生活・学習サポーター事業」の拡大に取り組み、小学校入学時の不適應を軽減することができた。

(2) 実施体制



(3) 研究成果

本事業において中核となる「仙台市確かな学力研修委員会」を中心とした取組では、調査結果を分析することにより、本市としての課題、各学校での課題、そして教科ごとの課題が明らかになってきている。その改善のための手立てを、具体的な授業で提案したり、多様な視点で調査活用協力校において実践したりすることは、教員の指導力向上への意識を喚起し、児童生徒の学力向上に着実に反映してきている。

2. 普及啓発と今後の取組について

(1) 成果の普及啓発に関する取組

- 本事業において、「仙台市確かな学力研修委員会」を設置し、平成22年度の全国学力・学習状況調査と本市の学力検査の結果を分析した。その結果から明らかになった課題の改善点をまとめた「指導改善のためのリーフレット」を作成し、小学校全学級担任に、中学校全教科担任に配布した。
- 授業における指導力向上のための教材開発や指導法の工夫を行い、課題改善に向けた「提案授業」を小学校4教科、中学校5教科で提案して公開した。
- 学力向上担当者会（悉皆：年3回開催）において、調査活用協力校（学力向上対策推進校）の実践発表を行うとともに、その取組を参考にしながら、小中連携の推進に向け、中学校区ごとに情報交換を深めた。

- 本事業で行った教科指導エキスパートの活用は、若手教員の指導力向上と教科の指導改善に大いに役立った。
- 本事業の取組を「学力向上に関する調査・実践報告書」としてまとめ、全小中学校へ配布した。

(2) 来年度以降の取組

本事業において大きく成果を上げ、今後さらに拡大・充実を図るものとして以下の取組が上げられる。

① 小中連携推進

小中連携推進校では、教員及び児童生徒が授業や部活動、行事等で積極的な交流を図り、学習の円滑な接続や、児童の進学への不安の解消につなげることができた。平成23年度は、それらの取組を参考としながら、「中学校区・学びの連携モデル事業」として小中連携を強力に推進する予定である。

② 学力向上対策推進

学力向上推進校の実践は、そのまま、他校の取組の参考となり得るものである。そこで、推進校の実践も受けながら、学校のみではなかなか改善が見られない学校の学力向上対策へ、市教委が重点的に支援する取組を行う予定である。また、小学校高学年基礎教科担任制も拡充して教科指導の充実を図る予定である。

③ たくましく生きる力育成プログラム

変化の激しい社会をたくましく生きる力の素地となる、知恵や態度を養う学習プログラム（学びの土台を整えていく人間形成プログラム）を開発し、各学校において実施していく予定である。

II. 推進校における取組事例

取組事例①

「確かな学力を育成するための指導方法の工夫・改善」

仙台市立八乙女中学校

(1) 学校の状況について

全国学力・学習状況調査や仙台市標準学力検査の結果から、本校生徒は基礎学力の定着についてはおおむね良好であるが、基礎的知識の習得が不十分である生徒が約

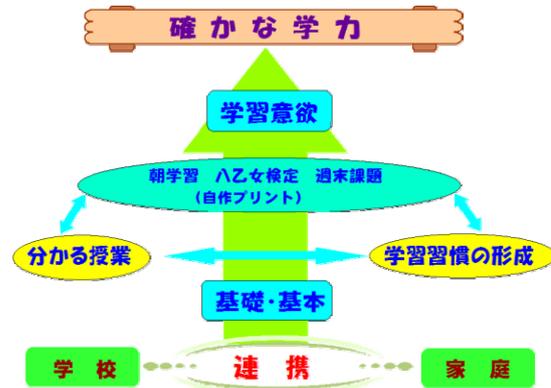
2割存在することが明らかになった。

日々の学習においては、指示された課題には取り組むが、予習や復習などの家庭における自主的な学習に対しては消極的な生徒が多く、少数ではあるが学習の意義を理解していない生徒も見受けられる。

本研究を始める前年度、本校教員を対象として実施したアンケートの集計結果から、本校生徒が身に付ける必要があるものとして、「学習習慣」「努力・向上心」「自分の考えや意見を伝える力」「基礎的・基本的な知識、技能」などがあげられた。

これらの実態を踏まえ、生徒一人一人に確かな学力を身に付けることを本校の学校課題ととらえた。

1年の1学期(国語、数学)は、朝学習・週末課題・「八乙女検定」それぞれの結果を当該必修教科の評価資料の一部として扱う。1年の2学期及び2・3年については、評価カードに観点別評価、評定を記載したものを学期末に通信表とともに配布する。



(2) 全国学力・学習状況調査の結果等を活用した取組について

- ①基礎・基本の定着を目指した朝の学習活動
全校で毎朝15分間の学習活動を実施した。1週間ごと国語・社会・数学・理科・英語の教科に関する基礎的・基本的な学習内容の定着を図るために、学習プリントを作成し全教員が交替で机間指導をしながらプリント学習を実施する。1教科について火曜日から金曜日まで原則として4日間連続して実施する。休日等で4日間連続実施ができない場合は、相当する内容を週末課題とする。
- ②学習習慣の定着を目指した、授業との関連を考慮した週末課題の作成と「生活のあゆみ」の活用

ア 週末課題

毎週金曜日に、朝学習の実施教科の教科担任がその週に実施した朝学習の内容と関連した週末課題を作成し、課題と解答を生徒全員に配布して、翌週月曜日の朝に提出する。学級担任は提出状況をチェックし、教科担任に提出し、教科担任は、理解状況を把握した後、本人に返却する。

毎週月曜日の朝に、前の週の朝学習・週末課題であった教科の「八乙女検定」を実施する。問題を作成する段階で基準を決めておき、大まかな目安として約60%以上の正答率を合格とする。学年で分担しながら教員が採点し、その後、教科担任がテストを確認し、担任を通して生徒に返却する。定着していない生徒には再テストを実施する。それでも合格できない生徒(検定同様、約60%以上の正答率を合格)には、課題(レポートや反復練習など)を与える。

イ 「生活のあゆみ」

1週間分記入するA4版(両面印刷)1枚を月曜日の朝に配布し、毎朝各学級で全員分を回収する。学級担任がチェック(押印、サイン、コメント等)し、帰りの会までに返却する。保護者にもチェックを依頼し、生徒一人一人がファイルにとじて保管する。「生活のあゆみ」を基に生徒が自らの学習や生活について振り返る時間を学級活動の時間に設定する。

生活のあゆみ

年 組 番 氏名
【詳細のゆずり】 A:できた(〇) B:まあまあ(△) C:今ひとつ(×)

月 日 月 曜日		月 日 月 曜日		月 日 月 曜日		月 日 月 曜日		月 日 月 曜日		月 日 月 曜日		月 日 月 曜日		月 日 月 曜日	
時	教科	持ち物	課題等	詳細	評価	忘れ物	部活動	授業態度	家庭学習	家庭学習	手印	家庭学習	手印	家庭学習	手印
1															
2															
3															
4															
5															
6															
連 続															
一行日記															

月 日 土 曜日		月 日 土 曜日		月 日 土 曜日		月 日 土 曜日		月 日 土 曜日		月 日 土 曜日		月 日 土 曜日		月 日 土 曜日	
時	教科	持ち物	課題等	詳細	評価	忘れ物	部活動	授業態度	家庭学習	家庭学習	手印	家庭学習	手印	家庭学習	手印
1															
2															
3															
4															
5															
6															
連 続															
一行日記															

備考

③分かる授業づくりを目指した授業研究

ア 本校における「分かる授業」の定義付け

「分かる授業」を『これが分かった・これができるようになった』と実感できる授業と定義した。そのために、生徒が『分かってほしい・できるようになりたい』という意識・意欲をもつことができること、生徒が

共に『分かり合うこと』ができること、生徒が『分かったこと・できたこと』を使いたくなることを視点として授業づくりに取り組んだ。

イ 授業・指導方法の改善

<校内授業研究の推進>

- 全教員による校内授業研究への取組
 - 3部会（文系教科，理数系教科，実技教科）での指導案検討及び授業研究会
- <仙台市教育センター学習指導訪問（要請訪問・3日間）による指導助言>
- 学習指導上の課題を実践的に解決し，生徒一人一人に確かな学力を育成するための指導・助言を受ける。
 - よりよい授業づくりを目指した研究の積み重ねに対する支援を受けることにより，教師一人一人の実践的指導力の向上を図る。

ウ コース別学習，TTなどの少人数指導の効果的な活用

<数学科・英語科におけるコース別・少人数指導（2・3年）>

- 希望コース別学習（生徒及び保護者の希望によるコース編制）
- 2学級を1つとした3コース編制（3年：基本→2コース 応用→1コース）

<理科・英語科・音楽科（3年）におけるTT指導>

④各種検査・調査による生徒の実態の分析・把握

全国学力・学習状況調査，仙台市標準学力検査について，各教科部会で「結果の分析」「成果と課題」「これまで効果的だった取組」「見直しが必要な取組」「今後の具体的な取組」等の観点で分析し，授業改善対策を検討する。その結果を職員会議で共通理解を図る。

⑤習得すべき基礎・基本を明確化したシラバスの作成

年度当初に各教科の1年間の学習について，概要，目標，授業計画（学習内容を含む），身に付けたい基礎・基本，学習方法に関するアドバイスをまとめた冊子を全家庭に配布する。

（3）成果について

①基礎・基本の定着を目指した朝の学習活動

定時に着席し，静かに学習に取り組む習慣が定着し，「八乙女検定」に向けて，朝学習や週末課題への取組の意欲が向上し

てきている。また，教育課程を弾力的に編成することにより，朝学習・週末課題・「八乙女検定」のシステムが効率的・効果的に実践され，生徒一人一人への支援の機会が増え，生徒への励ましや意欲付けを行うことができるようになった。

②学習習慣の定着を目指した，授業との関連を考慮した週末課題の作成と「生活のあゆみ」の活用

週末課題に対する保護者の理解も得られ提出状況は向上していることから，家庭での学習習慣の形成にも役立っていると考えられる。

「生活のあゆみ」を取り入れたことによって，生徒が自らの学習や生活を振り返るようになり，家庭における学習の時間が確保され，家庭学習習慣が少しずつ定着しつつある。また，学校評価の結果から，保護者も生徒の生活や家庭での学習，「生活のあゆみ」そのものの活用の仕方について以前より関心をもつようになってきた。

年度末の校内アンケート（教員）によれば「日々の点検に時間はかかるものの，生徒の心の様子や動きが把握できる」という評価が多かった。

（4）来年度以降の課題について

①基礎・基本の定着を目指した朝の学習活動

各教科2週間から5週間に一度の問題作成であるため，内容の吟味や工夫が課題である。また，新教育課程への移行に向けた枠組みの再編成を工夫していく。

②学習習慣の定着を目指した，授業との関連を考慮した週末課題の作成と「生活のあゆみ」の活用

週末課題未提出生徒が固定化しつつある。生徒に対する個別指導や保護者との連携を図っているが，放課後を有効に活用した補充学習など，これからの方策をさらに検討していかなければならない。

③分かる授業づくりを目指した授業研究

学力向上に向けた「分かる授業」のための手立ての模索，試行錯誤と工夫改善の繰り返しと積み重ねを継続していかなければならない。